

## 指導者（保護者）として大切にしたいこと（その42）

～「なぜマジメに練習している

ウチの子が試合に出られないの？」～

2022年12月吉日

U12部会広島地区

SV 大庭 浩資

広島県バスケットボール協会U12部会広島地区の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

12月に入り、急に寒さが厳しくなりました。また広島県でもコロナウイルス感染者が増えつつあり、さらにインフルエンザの流行も心配されます。

選手も指導者も日々の健康観察をこまめに行うとともに、体調管理には十分気を付けてほしいと思います。

まずは先日終わりました広島県大会におきまして、全国大会の出場権を得た、女子『府中』、男子『五日市観音』、また中国大会への出場権を得た、女子『海星』『南観音』『神崎』のチーム関係者の皆様、誠におめでとうございます。

それぞれの大会での健闘を祈念いたします。

さて先日、以下のようなストレートな題名で書かれたコラムを見つけ、興味をもって読んでみると、とても面白かったので紹介します。

タレントのマツコ・デラックスさんもこのコラムを読み、「この指導者の考え方、分かる気がする。すばらしいコーチだと思うよ」というコメントを残していました。

これは中学校や高等学校の話ですので、小学生のミニバスケットボールでの活動に直接当てはまるとは思いません。

また子育てに関する考え方も、時代の変化とともに、昔とはずいぶん変わってきていますから、このコラムの内容に賛否両論あっていいと思います。

指導者の皆様、保護者の皆様におかれましては、それぞれのチームでの話題にしていただければ幸いです。

「『なぜマジメに練習してるウチの子が試合に出してもらえないんですか？』と親から問われた顧問が、『もし嫌われたとしても、“努力が必ず報われるわけではないという現実”を教えるのも私たち大人の役目です。それに単なる思い出づくりではなく、勝つためにやっています』と答えたという話。ぼくは好きです」

ネクタイを製造する株式会社笏本縫製の代表であるしゃくさんこと笏本達宏さんが、自身の人生哲学を部活のエピソードに絡めてTwitterで紹介。そのツイートが8万以上のいいねと9千近くのリツイートが付く反響となっています。

笏本さんが紹介されているのは、とある学校の部活動での話。自身の子供が試合に出られない理由を顧問に問う親。「マジメに練習しているのに…」と生徒の親は

言いますが、それに対して顧問はこう答えます。「“努力が必ず報われるわけではないという現実”を教えるのも人の役目です。それに思い出づくりではなく、勝つためにやっています」

試合に出られないわが子を不憫に思う親の気持ちも分かりますが、それよりも顧問の言葉が強く胸に突き刺さります。“勝つ”という目標を掲げながら、子供たちに現実を教える——顧問の先生なりの「教育論」が伝わってきます。

このエピソードについて「ぼくは好きです」と語る笏本さん。ツイートのリプ欄にも多くの反響がありました。

「勝ちにガチでこだわるから、分かる事がきっとありますよね！」 **「こう言える顧問が、勝利至上主義でない事が推察できます」** 「大人になったら『世の中、そんなに平等じゃない』と思う」 **「勝つチームは試合に出ていない支えている部員も大切な部員ということを知っていると思います」** 「試合に出ること以上に大切に、貴重な経験を親が取り上げてしまったら、その子にいったい誰が教えるんだろう」 「そのようなしんどい経験を踏むのはとても大事。大人になってから笑い話にもなりますぞ」

近年、学校では生徒同士の不平等をなくすよう、運動会の徒競走でも順位を決めないなどの方針をとる傾向があります。しかし、大人になれば厳しい現実と直面し、競争社会の荒波に揉まれることに。その予行演習として、子供の頃から「**勝敗**」や「**思い通りにならないこと**」の体験や、**「試合に出る出ないにかかわらず、同じ想いを仲間と共有する」** 経験をさせることも、教育上大切なことのようにも思えます。

しかし、賛同のコメントが寄せられる一方で、このような意見もありました。

「勝つのは部活動の目的ではありませんけどね」 「部活で頑張ったけどどうにもならなかった、という思い出は後を引くし、その経験があつて良かった！って思ったことは一度もないなー」

人によっても合う合わないがあります。 勝ち負けや仲間と想いを共有することが良い経験になる人もいれば、逆にそれがかえって負担になり、むしろ自由にのびのびと過ごした方が個性や能力が活かせるような人もいますでしょう。どちらが良いとは一概に言えないのかもしれないね。

ちなみに、笏本さんはこの顧問について「練習や練習試合では広く機会を与え、その上で公式戦はシビアに。レギュラーメンバー以外への指導、ちゃんとしてたと思います」ともコメントされています。

上手な人だけを優遇するのではなく、部員全員にチャンスを与えていたとのこと。方針が良いかどうかについては意見が分かれるとしても、少なくとも生徒の教育に対して熱心に取り組む、素晴らしい先生であることは間違いないようです。

もちろん、投稿した笏本さんは、この顧問の言葉に対して好意的。当該のエピソードに加えて、自身の考えや体験談も紹介されています。その中で、笏本さんは「結果より過程」ではなく、「結果にこだわった過程」が大切であると語っています。

大人になり、家業の町工場の3代目として、事業を引き継いだ笏本さん。何度も現実に打ちのめされながらも、何とか生きられているのは、過去の積み重ねのおかげだといいます。

その一つが、高校時代の部活での経験。笏本さん自身も、最後のインターハイ予選でレギュラーの座を1年生に奪われ補欠に回されるという、悔しさを味わったことがあったのです。しかし、その際に監督から、「喜びも悔しさも、両方知っているお前が、これから一番強くなる!」と言われ、その言葉は今の自分にも影響を与えているといいます。まさに自身も、「マジメに練習したのに試合に出られなかった」という経験をされていたのです。だからこそ、一連のツイートには説得力があり、多くの人たちの心を打ったのかもしれません。

笏本さん：若者に可能性を示したり、楽しさを教えることも大切ですが、逆に厳しさや現実を教えることも大人の役割だと思います。

「夢は叶う」「努力は必ず実る」など希望ある言葉を否定しているわけではありません。ただ、頑張っていれば評価されていた学生の時代から、急に結果を求められ結果がでなければ生きることさえ難しくなる現実に放り出されてしまう現状で、若者が潰されないようにしないといけないとは思っています。

だからこそ、一生懸命に結果を追求した経験をしてほしいなと思います。